

亀淵 迪 先生を偲ぶ

原 康夫

亀淵さんは晩年にエッセイ集「物理村の風景」を刊行された。これらのエッセイは活字になるたびに恵送して頂き、読後感を電話や手紙で交換したので、読み返すと当時のことが思い出されてどれも懐かしい。ここではこの本には出ていない、思い出話を紹介したい。

I

1960年頃、理論物理の教員が、茗溪会館で昼食会を開いて朝永さんをお招きしたことがあった。

さて、「あまり急がないで量子力学を勉強しようとする初学者のために、量子力学がどのようにして生まれたのかを説明する」という趣旨で執筆された朝永さんの「量子力学」を小柴昌俊さんが英語に訳した本がその頃出版されたとき、「Nuclear Physics」誌の書評欄にポーアの共同研究者であったローゼンフェルトが「この本の記述は史実と違う」という書評を書いたことがあったので、この書評を気にしていた亀淵さんが、私にこの書評を食事会の話題にするよう指示された。

私の質問に対して、朝永さんは微笑みながら「司馬遼太郎の歴史小説には登場人物の会話が出てくる。この会話は司馬遼太郎の想像の産物だが、司馬遼太郎の歴史小説を読むと、史料に基づいて歴史家を書いた歴史書よりも、当時の実際の様子が良く理解できるだろ」と話された。朝永さんは「原クン、物理法則は発見するものであって導くものではないので、自分が理解しやすいと思うように提示すればよいのだと言われたと理解している。

この私の理解は「人工知能A Iは明示的な実験式を作り出すが原理は解明しない、つまり、A Iは実験データからケプラーの法則は導けるがニュートンの法則は導けない、また、ニュートン力学から量子力学も導けない」という事実と対応しているように感じられるこの頃である。

亀淵さんは「ニュートンの偉大さは、「質量」、「加速度」、「力」という無関係な物理量を1つの法則にまとめたことにある」と指摘されたこともあった。

その頃の素粒子理論研究者の中には、坂田昌一さんや武谷三男さんのように研究体制や自然弁証法に基づく研究方法論の重要性を声高に主張される人がいたが、亀淵さんが好んで引用された渡辺慧さんの表現によれば「富士山の登山道にいろいろあるように、研究方法はいろいろある」というのである。

亀淵さんは日本にいたころはバナールの「歴史における科学」などを読んだが、英国では問題にされていなかったので関心がなくなったとのことであった。

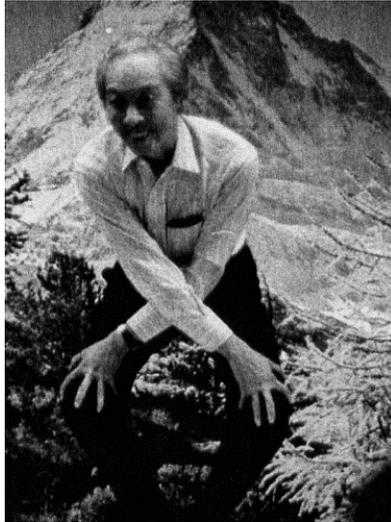
II ニュートン祭

ニュートン祭は、藤岡由夫教授が東京大学から東京文理科大学に輸入した物理学科の忘年会である。私の記憶している東京教育大学時代のニュートン祭は朝永さんの独演会で、主な行事は大教室での朝永さんの物理の講演会とそれに続く学生食堂での朝永さんの小話や「トンネル効果」の演技などの余興付宴会であった。

写真は、1977年の暮れに開かれた筑波大学での第1回ニュートン祭で朝永さんが演じた、「トンネル効果」の演技である。写真の状態から両脚を素早く閉じて開き、同時に両手を素早く交差させると、両脚も錯覚で交差したように見えるので、「トンネル効果」とよぶのである。大学院生時代の牧二郎さんが見たハリウッド映画「雨に唄えば」のラインダンスがヒントになったとのことであった。

筑波移転後は合唱や弦楽合奏などのニュートン祭記念音楽祭が企画実行され、私も合唱に参加したりしたが、集客力不足で長続きしなかった。

何回かニュートン祭記念雑誌が刊行されたことがあった。小林庸浩さんの名文が記憶に残るが、亀淵さんが執筆された記憶がない。これは不思議な事実である。



III

1972年のニュートン祭記念雑誌「プリンシピア」に、私は以下のように書いた。

『血縁関係の近さは1親等、2親等、・・・と表し、6親等までを親戚という。米国にいたとき、共著論文を書いた場合を1親等として研究者の関係の近さを測るという遊びをしたことがあった。私の場合、共著論文を書いた宮本米二さんは朝永さんと共著論文があるので、私は宮本さんと1親等、朝永さんと2親等である。そこで、私は1宮本、2朝永であるという。朝永さんは理化学研究所で仁科芳雄さん、坂田さんと共著論文を書き、亀淵さんは名古屋大学で坂田さんと共著論文を書いたので、私は3仁科、3坂田、4亀淵である。坂田さんは京都大学で湯川秀樹さんと共著論文を書いたので、私は4湯川である』という趣旨の雑文を書いた。

朝永さんはこの雑文を読まれたようで、しばらく後に、「原くんの書いた研究者の関係を親等で測るという話は面白い」というお褒めの言葉を故・藤田純一さんから伝え聞いて嬉しかった。私は4亀淵である。